

---

# シアワセ荘

璃玖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シアワセ荘

### 【Nコード】

N2945N

### 【作者名】

璃玖

### 【あらすじ】

長く暇な夏休み。

持て余す時間を有効に活用すべく、幸深<sup>ユキミ</sup>は一人家を離れてアルバイトを始めることにするのだった。

おんぼろアパートにて始まる新生活。

幸深に訪れるのは、幸せとは言えない出来事ばかりだった……。

このアパートに住みはじめたのは、賃金が安いのと、立地条件が良かったからだった。

外観へのこだわりも特になかったし、屋根があって雨がしのげればそれでいいとさえ思っていた。

志淡世荘との出会いは決して必然的なものではなかったのだと、そう信じたかった。

シアワセ荘

「…鍵はこれね。話した通りスペアがないから、無くしたりしたらご自分でどうにかしてくださいよ」

「……はあ」

シワシワの管理人さんの手から、2022としるされた鍵を受け取る。鍵の凹凸には、サビがはりついていた。

手洗いや風呂・洗面所等の水まわりは共同、流し台はあるがコンロはなし。

二階立ての六畳一間、1Kの安アパート志<sup>シアワセ</sup>淡世荘。それが、幸<sup>ユキミ</sup>深の新たな住まいだった。

「…よいしょと」

2022とかかれた木製のドアの前に、すべての持ち物が押し込まれたポストンバッグをおく。

鍵穴に錆びた鍵を差し込んで、右にひねった。

ガリガリ、ガチャン

何年も使われていなかったのか、奇妙な音を立てて鍵があいた。ポストンバッグを肩に掛けなおし、一気に扉を引いた。

「…くっさ」

カビ臭い空気が鼻の穴に容赦なく侵入する。ドアを開け放ったまま靴を脱ぎ捨て、入り口から真正面にある窓を開け放った。

真夏の生ぬるい空気が入り込み、ホコリが舞う。

「きつたないなあ」

そう一人ごちて、ぼろの畳の上に寝転んだ。

\*\*\*

管理人さんの話によると、志淡世荘の住居人は現在幸深一人だけらしい。管理人さんは別にある自身の住居にすることがほとんどで、アパートの管理室も閉室が多いのだという。

水まわり共同ということであったが、どうやら幸深一人で気がねなく使えるようだった。

隣人への挨拶などの心配もなく、のんびりできそうである。

「お風呂入ろうかな」

すっかり陽も落ちて、夏の短い夜に虫たちが鳴きはじめる。

涼しげな鳴き声にしばらく耳を傾けてから、窓を閉めて一階の浴室に向かった。

通路などもすべて建物内にあるので、蚊に刺される心配もない。木でできた階段に響く足音も、幸深しかないこのアパートでは心配する必要もなかった。

トトン、トトンと足音にリズムを付けながら、13段ある階段を時間をかけておりた。

一階には、水まわりの集中した共同生活室と呼ばれる部屋と男女共用トイレが一つ、住人のいない二つの空き部屋が存在していた。

入り口の真向い、生活室内の一番奥にある浴室の扉を開けば、案の定狭い浴室がそこにあつた。

どうせ一人で使うことになるのだから、申し分ない広さである。

脱衣所といえる部屋はなく、代わりに洗面所と浴室の扉の間に開閉できる薄いカーテンがあつて、心ばかりの脱衣スペースがもうけられていた。

「…この家で、複数の他人と暮らす勇気ないなあ」

薄っぺらいカーテン一枚の隔たりだけをたよりに人前で裸をさらすなど、できそうにもなかった。

管理人さんには悪いが、新たな住居人が現われないことを祈るばかりである。

浴室と洗い場をあわせても畳一枚分ほどの広さしかない風呂場には、いつからあるのかも知れない固形石鹸が一つあるだけで、シャンプーやリンスといった代物は置かれてなかった。

「持ってきたいて正解だったな」

トラベル用の小さなシャンプーとリンス、そしてお気に入りのボディーソープ。

ソープを手のひらにとれば、古くさい風呂場に甘い香りが広がった。

風呂に湯を張るのは面倒だったため、シャワーだけで済ませた。

備え付けのシャワーがまた曲者で、水温の変動がいちじるしく、  
こまめに温度調節をしなければならなかった。

おかげで普段の倍の時間風呂場にこもることとなり、すっかりの  
ばせてしまったのだった。

持ち物を右手に抱え、ふらつく身体を壁で支える。そのまま引き  
戸に手を這わせて、扉を開いた。

浴室にこもっていた水蒸気が外に出されて、視界が晴れる。冷た  
い空気が身体に触れて、気持ち良かった。

「カーテンくらい、閉めておいたほうがいいと思うぞ」

入り口の扉に寄り掛かるような格好で、一人の青年がそこにいた。

目を閉じて、また開く。パチパチとまばたきを繰り返して、ほっ  
ぺをつねってみた。

痛い、ということはつまり、どうやらこれは夢じゃないらしい。

「露出の趣味があるなら、止めはしないけど」

ため息混じりに言った青年に、幸深は己のおかれた状況を思い出  
す。

我に返って、大慌てでカーテンを引いた。

「は…はじめまして？」

すっかりパニックに陥ってしまい、出てきたのはそんな言葉だっ  
た。



青年の視線は明らかに冷ややかで、変なものでも見るかのように眉をひそめた。

「この状況で挨拶なんて、変わってるな」

「じゃあどうしたらいいって言うんですかーっ！てかアナター一体何者！？ここで何してんですか」

「良い眺めだと思って」

途端、全身が固まって声をも忘れる。

「ひっ……」

「冗談。そんな貧相な身体に欲情するほど飢えてない」

「ばっちり見てんじゃねーかああ！」

真っ赤に火照る身体にバスタオルを巻き付けて、一目散に生活室を出たのだった。

\*\*\*

悪夢だ。

何もかもが、きっと夢であつたに違いない。

見ず知らずの人間、それも同じ年ごろの男に素っ裸を見られただなんて、ギャグ漫画の世界でしかありえない。それもかなり時代遅れだ。

「管理人さんのバカー！誰もいないって行っただじゃなかあつ！」

今思えばあのヨボヨボ具合からして、管理人さんがボケていないという可能性は至って低かったのだ。

実は幸深がここに来る以前から、あの青年以外にも数人の居住者がいたのかもしれない。

老人のボケを責めることはできない。人は病を選べないからだ。だとしたら落ち度は、完全に気を抜いてしまっていた幸深にあるということである。

「つまりあれかな……私はあの人に、この貧相な身体のせいで猥褻物陳列罪で訴えられるってこと……？」

カーテンも掛けずに、他の居住者にチンケな身体をさらした罪で、刑務所行きに。

「……いやあーっ！そんな情けない理由で前科持ちなんて笑えない」

「訴えるつもりなんて毛頭無いけど」

「ぎゃー」

「……古風な反応だな、昔のギャグ漫画の」

「かかか勝手に入ってこないでくださいよー！」

「インターホン壊れてるし、ノックしても気付かなかったから」

「何の用ですか！」

「欲情して襲いに」

「ひいひい……！」

「冗談、忘れ物だ」

「……はい？」

手渡されたのは、シャンプーやリンスその他もろもろのお風呂セ  
ットだった。数回瞬きを繰り返したのち、点になった目で青年を見  
つめた。

「所持品を共同の場に放置していたら、他人に使われたとしても文  
句は言えない」

「は、はあ」

「風呂場のカーテンも同じ、共同の場での他人への配慮として、閉  
めるべきだ」

「すみませんね、貧相な身体さらして」

「安心してくれ、あんたの身体をはつきり見たわけじゃない」

「……え？だって、貧相な身体だって」

訳が分からなくて眉を寄せる幸深の言葉を聞き流しながら、青年は白いシャツの胸ポケットに指を入れる。銀縁のそれを、そっと掛けて見せた。

「視力が悪くて。普段は眼鏡だから」

「なっ……！」

立ち去りぎわ、それまで無表情だった青年の顔に初めて感情が浮かんだ。

嘲るような、嫌味な笑みだった。

\*\*\*

朝、特にやることもないのに早く目が覚めた。

学生の夏休みは、気楽でいて退屈な日々が長々とつながっているだけのものだった。

サークルやバイト、これといった趣味もない幸深にとってはなおさらで、冷房器具のない室内では暑さが気分を萎えさせるだけだった。

実家を離れて暮らす身分ゆえ近くに遊べる友人もおらず、何をする気にもならなかった。

「……こんな退屈も、バイトの面接通れば無くなるよね」

二日後に迫る採用面接を思い、期待と緊張とが同時にふくらんだ。

そもそもこのボロアパート志淡世荘に単身引っ越してきた理由と  
いうのが、希望するアルバイトの面接を受け、働くためであった。

希望先というのは、駅前にある小さなカフェである。規模は小さいながら、お洒落な内装と絶品のお菓子やお茶でお客を魅了し、地元  
の学生を中心として流行っているのだった。

暑さにぼうつとする頭を、窓枠にもたれさせて目を閉じる。

バイクのエンジン音が聞こえて、すぐ近くで止まった。

パタンという軽い音が聞こえて数秒後には、バイクは音とともに  
遠ざかっていった。

「…郵便？」

確か、アパート入り口のドアのすぐ近くにポストがあると聞いている。

窓枠から頭を持ち上げて、痺れ切った足を引きずるように歩きながら部屋を出た。

玄関の戸には自動ドアなどと洒落た機能はなく、カラカラと音の  
する引き戸を自力で開いた。

左右に視線をめぐらせると、ドアを出てすぐ左側の壁に金属で  
きたロッカーのようなものが取り付けられていた。

六つに区切られたうちの四つは、ドアが取り付けられていない  
壊れてしまったのか、金具だけが残っていた。

「…202は無事だったんだ」

壊れていない二つのポストのうち一つが202と書かれたポスト、もう一つは管理人室と書かれている。

壊れてこそ無いものの、どちらも錆付いてしまっていた。開けるのが、若干恐ろしい気もする。

いつまでもただ眺めているわけにも行かないので、意を決してポストを開けることにした。

何が飛び出してきたも逃げられるように、できるだけ体勢を後ろに持っていく。何とも情けない格好である。

「朝から妙なことをしてるんだな」

「ひーっ!!」

背後からの声に、張り詰めていた緊張の糸が音をたてて切れた。勢い良くポストが開け放たれて、入っていた郵便物が地面に落下する。

「…落ちたけど」

「知ってます!」

平然と言い放つ青年に、鼻息荒く吐き捨てた。恨みをこめて睨み付けるが、青年は飄々としたまま手紙を拾い上げ、幸深に渡した。

「…ありがとうございます」

「いや」

「…？何これ、私宛じゃない…」

ハガキが一枚と封書が二つあり、その全てが幸深宛てではなかった。

ハガキの宛名を探し、読みいる。

「おおさわ…ゆいつき？」

「イツキ」

「いつき？そつか、唯月って書いてイツキって読むんだ。お洒落だなあ」

「…そりやどうも」

青年は小さく嘆息して、幸深の手から郵便物を取り上げた。

「……？」

「僕がその大沢唯月。ポストが壊れてるから、無事なところに適当に突っ込んだんだろうな」

自分の言いたいことだけを言って、青年はくるりと背を向ける。

「じーちゃんには、とつとと修理するように言っておくよ」

礼の意味をこめてか、手紙を持った手をひらひらと振ってみせた。

「……………はい？」

……じーちゃんって？

「………孫、だったんかい」

狐につままれたような気分だ。

肩の力が抜け、口を開けたままだらりとうなだれた。

「…全然シアワセじゃねーし」

志淡世荘にて、妙な出会いを果たした二人。

今後、二人はさらに妙な関係を築いていってしまうことになる。

……それはまた、別の話　　なのかも。

\* E N D \*



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2945n/>

---

シアワセ荘

2011年1月13日14時54分発行